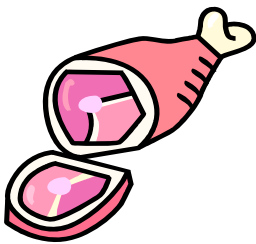


身近な食べ物を通して 「文化や人権」を考えてみませんか

日本社会での肉食の習慣は、近代以降に始まったように語られることが多いですが、実際には近世以前から様々なかたちで「肉」が私たちの生活に深く関わっていました。



古代の遺跡からは、肉を骨からはずそうとした痕のある動物の骨も多数出土しています。また古事記や日本書紀にも牛や鹿の肉を食べていたことが記述されています。

江戸時代、「薬食い」と称して鳥獣の肉を食べることは続いており、江戸の町並みを描写した安藤広重の浮世絵にも、「山くじら」（猪の肉料理）の看板を掲げた店が描かれています。また、武士も鷹狩りなどで得た肉を食べていました。

明治時代になり、開国によって欧米の食肉文化も持ち込まれるようになり、死・病牛馬の解体技術をもつ人々は、これまで磨いてきた技術を食肉処理業務に生かして、食肉の需要に応え食肉生産を支えました。

しかし、わが国では、古くから肉食の歴史をもっていたにもかかわらず、殺生を戒める思想の影響を受けて、肉を食べることや人間や動物の死を忌み嫌う意識が生まれ、死んだ動物の死体を処理して肉や皮を扱う人々に対しても忌み嫌う意識が広まったと考えられます。



近世につくられた身分制度のもとでは、死・病牛馬の処理は、皮革を生産する技術を培ってきた人々の仕事とされ、これらの仕事に従事する人々への差別意識を一層深めることとなりました。

食肉処理や皮革生產業務に従事している人々に対する差別や偏見が今なお残っているのは、このような近世の一時期の歴史によるもので、まったく根拠のないものです。

私たちすべての人間は、他の生き物の命をもらってしか、生きられないのではないのでしょうか。身近な食べ物を通して、「文化や人権」を考えてみませんか。

